

この関係は、
きっと——
罪深い。

父と……

結婚前夜。

もう戻れないと
わかっているのに、
あなたに溺れていく——。

クールエリートな父
×
健気で一途な息子
禁断の愛に
身も心も
乱される——

BL

ボーイズラブ小説





藤代 栄

実の父親に道ならぬ想いを抱いている。



藤代 雅臣

栄の父。

明日、俺は結婚する。

愛する女性と。

大学で出会った淳子は、柔らかく優しい笑顔を持つ、とても素敵なお女性だ。

音楽の趣味も合うし、俺の趣味のキャンプだって笑顔で付き合ってくれる。そして何より、話していても楽しい。

だから、大学卒業後。仕事も順調にいつてきたときに、海に見えるレストランで彼女にプロポーズをした。

願ってくれた彼女の横顔を見たとき。

この人と生きていきたいと思った。

——だけど、実は俺には彼女以上に好きな人がいる。

もう十年以上前から。

いや、きっとそれよりもっと前から。

自分が、男を……いや、他ならぬ「父親」を性的な対象として見ているのだと気付かされたのは、中学

生の時だった。

真夜中、小腹が空いてリビングを覗いた俺が見たのは、暗い部屋でスマホを見ながら低く呻き声を上げ、自慰をする父の姿だった。

ショックだった。

けれど同時に、目を逸らせなかった。

その日見た夢は覚えていない。

ただ、目が覚めたとき、心臓が酷く高鳴っていて、下着がじっとりと濡れていたことだけは覚えている。父の、押し殺したような呻き声。腕の筋肉の隆起。反らされた首の男らしいライン。

思い出すだけで、胸の奥が疼いた。

それから10年。まもなく俺は結婚する。

淳子を愛している。

それは本当だ。

だけど。

だけど俺は、本当は……



リビングの、明るい照明に照らされながら、俺はソファに座った父の足の間に座りこんでいた。じゅ、と音を立てて、熱く猛った肉棒に舌を絡めつける。

ずっと夢にまで見ていた、濃厚な男の匂いと硬さに、頭がくらくらと痺れてしまいそうだった。

「父さん……っ」

「ああ……いいぞ、栄。気持ちいい」

父の、少し皺の増えた大きな手が、慈しむように俺の頭を撫でる。

こうして父に頭を撫でてもらうなんて、一体何年ぶりだろうか。その手のひらの温もりが嬉しくてたまらず、俺は溢れる唾液を厭わずに喉の奥を開き、父の太いペニスを最奥まで迎え入れた。

ぐぷ、ぐぷ、と粘つく音を響かせながら必死に頭を上下させると、頭上から「くう……っ」と父の低く掠れた呻き声が降ってくる。

気持ちよさそうな声に、ぞくりと腰の奥に痺れのような快感が走るのを感じた。

二十も年の離れた男が……自分の遺伝子の元となった実の父親が、自分の舌で快感を得ている。脳をじりじりと焼くようなその背徳感が、皮肉にも俺の身体をこれ以上ないほどに昂ぶらせた。未だ触れられてもない胎の奥底に、熾火に炙られているかのように熱が溜まっていく。

「く、……栄、出すぞ」

低く掠れた父の声。同時に、喉の奥へ、熱くてどろりとした塊が勢いよく叩きつけられた。

「げほっ、げほっ、……おえっ」

青臭くて、僅かに苦い。思わずごぼごぼと背を震わせていると、その背に大きな手が労るように触れた。顔を上げると眉尻を下げた父が、俺の目尻に溜まった滴を指先で拭った。

「……やめておくか？」

その言葉に口を押さえながら、俺は頭を振る。

いやだ。今日を逃せば、明日には俺は結婚する。

こうして、父親と情を交わすチャンスなんてきつともう、来ない。

「い、やだっ、父さん、お願い、抱いて……」

今夜だけは、この身体と心に父親の証を刻み込んで欲しかった。

必死に縋り付く俺の視線を受け止めた父の瞳が、ふっと暗い熱を帯びる。

「後悔、するなよ」

「……しないよ」

逞しい首に両腕を巻き付けて、肉厚な唇に自分のそれをくつつける。戸惑うような気配の後、緩んだ隙間に舌をねじ込んだ。逃げる舌を追いかけ絡め合い、ぐちゅぐちゅと唾液を絡め合う。

アルコールの匂いと、ほんのすこしだけ苦い煙草の香り。すごく、興奮する。首の後ろに父の手が伸び

る。するり、と髪の毛の生え際を撫でられてからぐつ、と大きな手で後頭部を掴まれた。驚き、縮こまる俺の舌を、今度は父の肉厚の舌が絡め取り、強く吸い上げられる。

「あつ、ん……」

絡み合っていた舌が解かれ、俺の唇から出ていく。俺の舌と繋がっていた銀の唾液の糸が、重さに耐えかねぷつり、と切れた。

「栄……」

「父さんに、めちゃくちゃにされたい」

父の唇に甘く噛みつきながら囁けば、父の目が獣のようにぎらりと光った。

「……寝室へ、行くぞ」

結婚前夜。父と……………

発行日：2026年7月某日

著者…かのう。

サークル…まるつと

表紙・本文制作…かのう。

© 2026 かのう。